

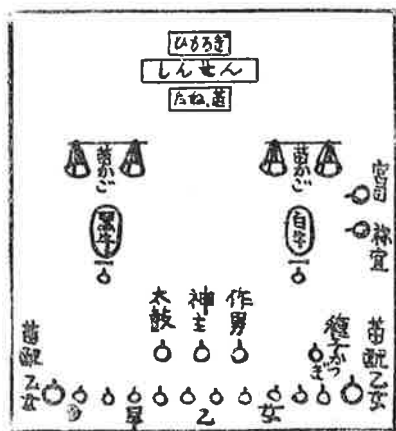
若宮八幡社の御田植神事

入江英親

大分県速見郡杵築町宮司に若宮八幡社が鎮座している。此の神社は石清水八幡宮の御分霊を寛和元年八坂郷生地村柏嶋に勧請したものであつて、後承安三年神託によつて八坂中村に遷座、更に嘉暦三年に現在の地に遷座したものと伝えられている。従つて氏子区域は杵築町と八坂村にわたるものと一応考えられるが、事實は杵築町と北杵築村の一部のものが氏子となつてゐる。社格制度の存していた頃は県社であつたが今は社格はない。祭神は仁徳天皇・宇孔姫・久礼姫・菟道稚郎子となつてゐるので、所謂農業神ではない。然し何れもの神社がそうである様に、当社も亦その祭祀には農業関係のものが多く、その中で特に氏子に親しまれてゐる行事としてあげることの出来るのが四月初卯の御田植神事と、九月の楽の市、十二月の牛馬市とである。

牛馬市は承安三年に始められ、日本の三大市の一つとして全国的に知られてゐる。楽の市はもと神宮寺であつた護保寺の記録に依ると、放生会が再興された翌年即ち元祿十年から行われたことになつてゐる。御田植神事の起源に就いては今の所まだはつきりしていないが、恐らく楽の市同様元祿の頃再興されたものではなからうか。

御田植神事は最初は旧曆二月初卯の日に行われていたが、その後新曆の三月十七日となり、更に交つて現在は新曆四月の初卯の日に行ふことになつてゐる。午前中に祈年祭を終え、午後この神事を行われる。本年は去る四月五日が初卯に當つていたので、この日午後二時から北杵築村の中津屋と五田部落の人等に依つて、標殿前の庭上に設けられた臨時の齋場に於て次の通り盛大に行われ



御田植神事齋場略図

た。

午後二時禰宜及び田植仲主、作男、太鼓所役、苗配乙女、早乙女、牛等所定ノ座ニ著ク (齋場略図参照)

是ヨリ先社殿ニ於テ種子かゝるい結婚ノ式ヲ行フ
禰宜は当神社の次席の神職である。田植神主は本日の

奉仕者中より選ばれた臨時の神主である。一同斎場の定められた座席に著くが、是より先に拝殿に於て種子かるい男と、その妻となるべき者との間に三三九度の夫婦盃が行われる。妻になる者は希望する男子が申出る。

次 修祓

便宜上神籬の前に設けた祓案の前に禰宜が進み出て祓詞を奏し、終つて先ず斎場、次神饌、次奉仕者、次参列員等の順序に順次誦う。

次 禰宜神饌ヲ供ス

神饌は便宜上預め供付ひにしてあり、この時酒瓶と水器の蓋をとる。神饌は米、酒、魚、野菜、塩、水ぐらいのものにて特別多つたものはないが、神饌の前の案上に早苗と藁包に包んだ種子扱が置かれてある。

次 官司祝詞ヲ奏ス

官司は当神社の主席神職である。本年は官司は奉仕せず禰宜が代理した。祝詞は豊作を祈る意味のものであつて次の通りである。

此乃斎庭爾神籬挿立比招奉里坐奉苗掛卷母畏伎御年皇神等乃字豆乃御前爾若宮八幡社官司氏名恐美恐美母白左久今日乎生日乃足日止執行布此乃大宮乃卯月乃大御祭爾此乃斎庭乎御田代止為互早乙女田人等玉久代手並

母綾爾忌歟斎鋤牛形以氏御田植乃神事仕奉良久乎請給比斎回里清回里試奉苗札代乃御饌御酒糶々乃物乎平介久安介久聞食志此賀御田業仕奉苗人々波更奈里御氏子乃諸々手眩爾水泡搔垂里向股爾泥土搔寄世取作良牟奥津御年乎患風荒水爾令遇給波受秋乃足穗波八束穗乃茂穗爾成幸爾給比家乎母身乎母枉乃枉事無久豊爾平久佐加爾令立栄給爾止恐美恐美母白須

次 牛斎田ヲ廻リテ苗代ヲ搔ナラス

牛は馬歟をつけた白と黒との二匹の張子の牛で、夫々一名づつの牛使いがつき、斎田をしるがきする。

次 種子かるい種子扱ヲ時ク

庭上に安坐している種子かるいは立つて案前に進み、案上の種子扱をとり、泥まみれになつて斎田に種子を時く。此の時種子かるいの元氣余つて参拝者に泥かはねかゝる。尙扱種子は神事の終了後希望の参拝者に頒つ。

次 田植神主祝詞ヲ奏ス

神前に進んで豊作を祈るのであつて次の通りである。

掛卷母畏伎此乃郷村乃産士大陣止称言竟奉苗若宮八幡社乃大御田植乃今日乃御祭爾仕奉苗田人等其祝甲事波此郷村爾作里止作苗物波田津物母畑津物母皆八束穗爾為里氏子乃家々利益母多爾病尤久災尤久千載乃富乎生左牟種子万代乃榮乎作良牟苗乎今日乃生日乃足日爾

蒔植候止申事乎大神等神随母於卒加志止見覽給比其
此祝比申言乃万々爾成幸閉給閉止申事乎植女等手肱爾
水泡蟻垂利向股爾泥土畫寄世氏誰母誰母聞食世止宣
作男神前ニ進ム

作男は神座の前に進み出て「斯様に候ものは当所のものにて候。某柄振の役なればみ田をさして急ぎ候。」と唱えて鉢をかつき、顔つき足どり面白く斎田を一巡する。

次
作男畦ヲ塗ル

斎田を一巡して神座の前にかえつた作男は「急げば程なくみ田につき、みやぼうしや、おとぼうし、ほほう平平としてよき御神田かな。」と唱えて畦塗りの所作をなす。

次
作男早乙女ニ田植ノ準備ヲ促ス

作男は神座を背にして早乙女に向い「いかに早乙女、早苗をくばり、神主殿の御出を待とうずるにて候。」と唱えて、早乙女に田植の準備を促す。

次
苗配乙女早苗ヲ配ル

二人の苗配乙女の前に進み出て案上の早苗を籠に移し、かつぎて早乙女の前に至り、歌いつゝ早苗を配る。歌は次の通りである。

小田の細道乙女の小袖よ。田面吹く風静かに流すよ。

めんでたしめんでたし目出度き御代の、菜の苗はよ
代つきぬ。目出度き早苗よ。

次
早乙女早苗ヲ植エル

田植神主、太鼓所役及び作男は神座の前に進み出て回転して早乙女に向い、先ず太鼓所役は「そもそも神主よき方に向い、御幣をあげて声をとてー」と唱える。次に田植神主は御幣を振りながら、太鼓所役は太鼓を打ちながら作男と共に音頭をとるが、これに合わせて早乙女は田植歌を歌いつゝ前に進んだり後ずさつたりしつゝ早苗を植える。田植歌は次の通りである。

(○)印は音頭、▽印は早乙女)

○植えい植えい早乙女、笠買うて着しようよ。

▽笠だにたもるなら、なんぼも田は植ようよ。

○おお如何に早乙女、化粧文はとんだりとて何にしようか見やるよ。

▽つらくのおの子の、いうた事へ腹立つ。

○げに腹が立つかの、おお、まこと腹が立つなら、苗代のすみずみで水鏡見よがし。

▽苗代のすみずみで水鏡をうろうるか。

○苗代のすみずみで水鏡は見たりしも、顔はよごれたり。

▽顔はよごれたりとも、思う殿御をもちたい。

○おお如何に早乙女、富岡山の白玉椿に、花の咲いた
を見たかの。

▽げにと見たれば、こがねの花も咲いたよ。

○めでたし、めでたし。目出度き御代には、千町
や万町の御田植にふれり、ふれりや、ふれりや、ほ
つばいや。

次

種子かるいノ妻小昼用ノ握飯ヲ持チ来ル

身重ながら種子かるいの妻は、小昼用の握飯をはんぎ
りに入れて頭に載せ運んで来る。これは神座の前の案
上におく。

次

種子かるいノ妻帰途拜殿前ニテ分娩

急に産気づいた種子かるいの妻は、拜殿前にて苦し
みながら出産する。生れた嬰兒が男子の場合に本年は
氏子に男児の出生が多く、女子の場合は女児が多いと
信ぜられている。此の時の男女の別は預め宮司が神前
で籤を引きこれをきめておく。

次

田植神主神田ヲ被ウ

田植神主は神座を背にして早苗を植え終つた神田に向
い、これを被い清める。

次

各退下

禰宜及び田植神主以下全員順次斎場より退下する。

以上が御田植神事の次第の概略である。次第中修談の次に
降俣行事、各退下の前に昇神行事が行われる筈であるが略さ
れている。奉仕者の服装は、禰宜及び御田植神主は狩衣に烏
帽子、太鼓所役は羽織に袴、他の者は全員筒袖の浴衣がけ。
苗配乙女は袂のついた浴衣を著、赤袴をかけ、花笠をかぶる。
早乙女も袂のついた浴衣を著、赤袴をかけ、頭には拭をかぶ
るが、以前は花笠を用いていた。尙人数は早乙女十名、苗配
乙女二名、牛使い二名、その他は一名である。もつとも牛は
前脚と後脚に一名づゝが当てられているので、二匹の牛で四
名が必要である。

要するに神社の祭祀には農事に関するものが多く、御田植
神事も各地の神社で行われている。本県内でも相当数のほ
るものと思う。当神社の近くでは、宇佐郡宇佐町に鎮座する
宇佐神宮や、海水浴場として知られた東国東郡奈狩江村大字
奈多の海岸に鎮座する奈多八幡神社とか、同じく東国東郡安
岐町(もと朝来村)明治に鎮座する山神社等でも行われてい
る。奈多八幡神社や山神社で行われているこの神事は、当神
社のものと甚だよく類似している。何れも能楽の狂言を思わ
せる所作の多いことは御田植神事の起源等と何等かの関聯が
あるのではなからうか。又この神事につきものは牛であるが
宇佐神宮の御田植神事には出てこない。而して行事の趣きも
多少異にしているので、適当な機会があれば御紹介したいと
思っている。(杵築高校教員)